

2014年05月12日

言葉と行動

小山照夫 国立情報学研究所

1. はじめに

これまでの考察から人間が言語を用いるのは、言語記述の受け手に送り手の望む行動をさせるためであると言える。[1]言語の送り手は、自身の欲望達成のためにより有利な状況を実現するため、受け手が特定の行動を起こすことを期待して言葉を用いるのであり、受け手にそのような行動を実行させるために言語記述を提示する。しかし一方で、このことが可能になるということはすなわち、言語記述の受け手が、与えられた記述に対して送り手の期待通りにその行動を変化させるであろうと期待されるだけの十分な理由が存在するはずである。ここで問題は、言語記述を与えられた受け手の側でその行動を変化させるのは、一体どのような事態が生じた結果なのであろうかということである。

ごく一般的な言い方をするなら、言語記述と言う情報が新たに与えられたことにより、受け手の認識する世界が変化した結果、受け手にとってその欲望と欲望達成のための条件が変化して、それ以前には考えられなかった特定の行動を起こす動機が生じたということになるのだが、この背景には相当程度複雑なプロセスが介在していることが予想される。以下ではこのプロセスの詳細がどのようなものと考えられるかについて検討したい。

2. 行動と欲望

2.1. 欲望達成手段としての行動

行動は何のために行われるかという観点から考えるなら、人間に限らず、哺乳動物程度に複雑な身体構造を持つ動物が行動を起こすのは、基本的にその個体の持つ欲望を達成するためであり、さらに言えばその根底には利己遺伝子の働きがあると言える。[1][2]動物はそれぞれの種ごとに、利己遺伝子の目的である自己の遺伝子保存のために有効な特定の目標状況を持っており、その状況を実現しようとする意識が欲望という形で発現することになる。この状況を具体的なものとして実現するための手段が行動であり、それぞれの個体は、各時点で可能であると信じる行動のうちから、その欲望が達成される見込みが最も大きいと期待できる行動を選択するのだと考えられるであろう。

ここで行動を選択する背景には、欲望を達成する可能性が大きいと期待できる行動と、そうではない行動が存在するという事実がある。さらに、ある行動が欲望達成により有利であると判断するにあたっては、個体が行動可能な世界の現状と将来の可能性について一定の認識を持っており、実際に行動可能世界において自身の行動が、その帰結としてどのような世界状況の変化を引き起こす可能性があるかについて、少なくとも主観的には予測できるだけの知能を持っていることが要請される。

2.2. 最適行動決定と情報

動物全般にとって世界の状況と可能性は固定されたものではなく、時間とともに変化している。その変化に応じて欲望が達成される可能性を持つプロセスも変わって来るのであり、個体が具体的に採るべき行動も変化するであろう。絶えず変化する世界の状況を把握するためには情報が必要となるが、動物は主としてその感覚器官を通じて周辺世界から絶えず情報を受け取っている。一方で動物は過去の経験から、特定の状況下での特定の行動がどのような帰結をもたらすかを予測する知能もまた持っている。そこで動物は周辺世界からの情報と過去の経験から得られた知能に基づいて、各時点での状況と将来の事態推移の可能性を把握し、その状況の下で自身の行動としてどのようなものが可能であり、それぞれの行動を採った場合の帰結がどのようになるかを予測することになる。言い換えれば個体はそれぞれの時点での自身の世界把握に基づいて、可能な行動の効果と帰結を予測し、危険を回避しながら、自身の欲望達成の観点から最適と判断される行動を選択していくことになると考えられるであろう。

このことから結論できるのは、個体がもしその行動を変更するなら、それは外部からの情報を通じて個体の把握する世界の状況と可能性に変化が生じ、結果として最適と判断する行動が変わるからだということである。ここで外部から与えられる情報としては、人間以外の動物では主として感覚器官を通じて直接に得られる感覚刺激がその主要なものとなる。人間においても各種感覚刺激は情報として重要なものであるが、しかしこれ以外に、言語情報に基づく情報が大きな役割を果たしていると言えよう。この言語情報の送り手は、外部にいる別の個体であることもあれば、思考という形で内部から生じてくる場合もある。人間の使用する言語は非常に複雑な構造を持つが故に、世界の状況とその可能性、行動の帰結に関する予測において、他の動物とは比較にならないくらいに、言語情報が大きな効果を持つことになる。ここで問題は、受け手の中で言語情報が実際に機能するそのプロセスである。それは例えば視覚など、他の感覚器官を通じて得られる情報と類似なものと言えるであろうか。

3. 情報としての言語の特徴

3.1. 言語の記号性

まず第一に考えなければならないのは、言語記述は直接事態や対象を体験させるものではないということ

とである。言語は記号であり、他の何か(事態／対象)を指示するものであるから、対象とそのあり様を直接体験する感覚とは独立している。このことは言い換えるなら、言語情報を用いることによって、直接感覚的に把握できない事態を想定することが可能となることを示している。個体の間の分業においてこのことが決定的な意味を持つことはすでに述べたが、[1]言語の持つこの特徴は時間的・空間的に離れた事態を想定する事も、また実際の世界には存在しない物語の中の事態を想定することも可能にする。

しかし同時に、言語によって想定される事態そのものは実際の感覚的裏付けを持たないから、記述される事態が実際に生起しているかどうかは言語情報だけでは確定できないことになる。これは言語記述の真理値決定問題として古くから知られている問題であるが、記述された事態が実際に成立しているかどうかを決定するためには、記述の属する世界の状況を実際に確認しなければならない。

3.2. 言語記述の部分性

これに加えて、言語の記述能力には大きな制約があることも考慮する必要があるだろう。どのように単純に見える事態でも、その詳細を見ればほとんど無限に複雑な様相を持つのであり、事態に関して感覚が受け取る情報のすべてを言語的に記述できるわけではない。実際には感覚によったとしても、本当の意味での事態の全体を詳細に把握することはおそらくできないのだが、それでも実際の感覚体験と比較すると、言語情報として記述できる部分はごく一部に留まるであろう。ここで問題は、多くの場合記述の受け手が実際に行動を起こすためには、記述された情報だけでは不十分なことである。

そこで通常は言語情報の受け手は、記述された情報を様々に解釈し、受け手の持つ知識によって事態の様々な詳細を補足することによって、言語的に記述されていない部分まで再構成する必要が生じてくる。受け手はこのような再構成を通じてのみ、実際の行動に結びつけることのできる事態を想定できることになる。

一方でこのことは言語記述の解釈は、実は受け手の経験と知識に大きく依存するというを示している。さらに言うなら、ここで可能な補足はただ一通りであるとは限らず、通常は何通りかの可能な候補が存在する。これは言語記述だけでは事態を完全には確定できないことのもう一つの側面でもある。言語記述は事態その物を示すというよりは、事態の様々な可能性を示しているということもできよう。[3]

3.3. 言語の記述する可能性世界

直接体験していない事態を記述できる言語を持つことにより、人間は、厳密な意味での言語を持たない他の動物と比較して、自身の周囲の行動可能世界について、より多岐に渡る可能性を想定できるようになると同時に、直接には行動と関わらない時間的、空間的に離れた世界や、実際には実体として実現されることのない架空の物語世界についても、複雑かつ多岐にわたる可能性を想定することが可能となる。

直接体験できない、離れた世界の出来事であっても、それが現実的なものである以上、その影響が受け手の行動世界に及ぶ可能性は常に存在しているから、実際に行動を起こすにあたって、その可能性を評価できる事は、予期せぬ事態により目的が達成できなくなる事態を回避することに役立つ場合があるだろう。

一方で小説や伝承などの、実際に存在しない物語世界の事象は、実質的に行動世界に影響を及ぼすことはないと思われるかもしれないが、必ずしもそうとは言いきれない。個体間で共通する物語世界は、その世界に関わる会話を通じて個体間の社会的関係を保守する上で一定の役割を持つことがある。また、物語には実際に実在世界で起きた事態を別の世界に置き換えた記述もあるし、過去の事実から推定すると実際に起こっても不思議ではない事態の記述もありうる。ここでもまた、言語記述の部分性により、具体的事実というよりは抽象化された事態の可能性が示されていることが関与している。これらの事態は、条件に合わせていくらか修正をするなら、現実の行動世界で生起する可能性を持つ事実であるとも考えられるであろう。物語からこれらの可能性を認識する、あるいは漠然と感じていた可能性が強化されることがあるなら、実際に主体の行動世界での判断と行動様式に影響を及ぼすこともあると言える。仮想的な世界の事態として記述された物事が実際に生起する可能性を認識しているのと認識していないのとでは、主体の欲望構造、またそれに基づく行動様式に相違が生じる可能性があると考えらるべきであろう。

また別の側面として、たとえ実際には起こり得ない事象であっても、それを想定することを通じて仮想的にある欲望が達成される状況を想像してみることはできるのであり、その想定を通じて欲望のより詳細な側面を明らかにする効果がありうる。結果として、それは個体の欲望を見直し、欲望構造の強化ないしは変化をもたらす可能性を提供するものと言えるであろう。欲望構造が変化するなら、現実の行動世界の事象はまた、異なった意義を持ち得るのであり、主体の行動を変化させる可能性ももつものと言える。実際には決して実現することのない神話などが人間の幅広い興味を惹きつけるのは、このような効果も関与していると考えてもよからう。言語を持つことにより、人間は広範な欲望の可能性を想定し、それを追求するための行動を探索するようになる。

3.4. 言語と人間の社会構造

言語を持つ人間が多様な世界の可能性を認識しているという事は、一方では人間社会の複雑化という状況をもたらしている。多様な事態を想定できることは、人間の欲望構造と欲望を実現しようとする行動を複雑なものとする。過去に起こった現象を考えるなら、この多様な可能性の認識が人間に生産という概念をもたらしたと考えられる。[1]実際に生産という活動が始まると、その効率化という視点から分業という形態が出現してくるし、さらには生産財と消費財を利用する権利という視点から、様々な競合勢力の間の紛争という状況が生じてくるし、これに対して社会ルールという形でその解決方法なども確立されることになる。生産活動の開始は、それ以前と比較して人間の社会構造を複雑かつ多様なものとしてきた。さらに、複雑な社会構造は個体の社会的立場に関する多様な欲望構造を生み出していくことになる。このことが、社会の中で暮らす個体にとっての社会的な欲望構造を複雑化し、状況認識と行動決定の問題もまた一層複雑なものとして来ている。

4. 行動における言語の役割

最初に述べたように、言語記述はそれが受け手の行動に影響を及ぼすことによってはじめて意味のあるものとなる。しかし、このことはどのようにして可能になるのだろうか。以下では言語記述がどのようなプロセスの下に行動に影響を及ぼすかを考察する。

4.1. 送り手から見た言語と行動

言語の送り手は、複雑な社会状況の中で、その状況と送り手の欲望構造を前提とした上で、言語記述を提示するという行動によって、その受け手に送り手の欲望達成のために有利となる行動を引き起こす必要がある。問題はしたがって、どのような言語記述の提示が受け手の行動を引き起こす上で有効であるかということになる。送り手の側からすると、有功と信じられる言語記述の選択は送り手自身の過去の経験に基づいて行われるであろう。実際に当面の受け手との間で過去に何らかの交渉が経験されていれば、より詳細な戦略決定が可能となるであろう。しかしそうでない初対面の場合には、類似した状況での他の受け手との交渉過程を一般化した上で行動決定が行われることになる。さらに、自身が使用した言語記述とその効果だけではなく、自身の受け取った言語記述が自身の行動にどのような影響を及ぼしたかも参考とされるであろう。またこのとき、実際に提示される言語記述だけではなく、提示する方法の詳細、たとえば口調や身振り、表情なども受け手の行動に影響を及ぼすのであり、これらも含めて実際の提示が選択されることになる。それでは受け手の側では、言語記述を与えられることによってどのようなプロセスが生じており、結果としてどのようにその行動を調整することになると考えられるのであろうか。

4.2. 記述の属する世界の同定

受け手に言語記述が提示されたとき、受け手はまず記述その物がどのような世界のどのような事態に関わるものかを推定しようとする。先に述べた言語の特徴から、言語記述その物は、受け手の行動世界から物語世界に至るまで、様々な世界のうちどれかに属する事態についての記述であると考えられる。さらに言えばそれは、記述される事態について送り手が注目する側面に焦点をあてた結果、記号列として提示されたものと考えられるであろう。そこで受け手の側では記述がどのような世界に関するものなのか、記述の示唆する事態が実際にその世界で成立しているかどうかを判断する必要がある。実在しない単なる仮定の事態について意見を交換する場合と、実際に起こった事態の変化を受けて行動を提案する場合とでは、たとえ記述上は同一のものであったとしても、記述される事態の属する世界は変わってくる。前者では元から存在する世界について仮にある事態が生じることを仮定した仮想的な物語世界を想定すべきであろうし、後者では実際に行動が可能な世界を想定すべきであろう。

4.3. 送り手の意図推定

一方で受け手は記述を受け取った際に、記述を提示した送り手の意図がどのようなものであるかについても推定しようとする。実際には送り手の意図と記述の属する世界とは相互に影響を与えているのであり、例えば送り手の意図が単純に相互の社会的関係の調整として相互の友好関係を確認するというところにあるなら、記述は例えば日常生活上の出来事のような行動世界に属するものであってもかまわないし、また最近読んだ小説の中で成立している架空の物語世界のものであってもかまわない。しかし、例えば商品売ってほしいなど、送り手が行動世界で受け手が行動することを期待しているとすれば、実際の記述も行動世界のものでなければならないことになる。場合によっては送り手が受け手の判断を誤らせる意図をもって記述を行うことも排除できないこともある。また、記述が行動世界で実現する事が不可能であるような事態としか解釈できない場合送り手の意図は、記述内容が行動世界でそのまま実現されたり、逆に回避されたりするための行動を期待しているのではないと判断すべきであろう。

送り手の意図と記述される世界との決定にあたってはまた、送り手と受け手の社会的関係性も影響してくる。例えば職場での役割分担関係が決まっている場合、依頼の形をとった記述であっても、実質的には命令である場合も考えられる。相互の社会的関係が友好的か敵対的かで、同一記述を提示する送り手の意図はまったく異なったものになる場合も考えられるであろう。

4.4. 事態の再構成

送り手の意図と事態の属する世界がおおよそ推定されたなら、受け手は自身の持つ知識によって事態の詳細を補足することになる。言語記述は通常は事態のごく一面、特に送り手の注目する側面だけを表しているため、多くの場合言語記述を与えられた受け手がその行動を具体的に修正する上で十分な情報とはなっていない。そのため受け手は言語記述に現れない事態の側面を推定し、補足する必要がある。ここで、事態その物の詳細、あるいは送り手の意図や記述の属する世界について、受け手の側で常に一義的に決定できるわけではない。一般にはそれぞれにいくつかの可能性があるから、受け手はいくつかの組み合わせについて、それぞれの可能性を判定し、どの可能性が最も高いかを判断する必要がある。場合によっては複数の可能性を同時並行的に考慮する必要がある場合も考えられるであろう。ただし多くの場合社会的関係性から、複数の可能性を保留する必要が生じる場合はそれほど頻繁には生じないと考えられる。関係が日用品の売買などである場合などでは、ほとんどの場合は最も確からしい一つの場合を想定するだけで問題は生じないであろう。複数の可能性を保留する場合としては、送り手と受け手の相互関係が曖昧な場合や、記述される事態が複雑な場合等が考えられる。例えば複雑かつ大規模なプロジェクトの契約などでは、より多くの可能性について同時に検討する必要がある場合もあると考えられる。

4.5. 送り手と受け手の相互モデル

送り手が言語記述を提示する方法、また、受け手が送り手の意図を推定し、言語記述を解釈していく方法は、それぞれが相手について想定するモデルに依存するが、このモデルは送り手と受け手の間の相互経験によって変化する。送り手と受け手が過去に何度か交渉を持っている場合、過去の経験が意図推定において重要な役割を果たす。一方で初めて出会った場合には、一般的な送り手の欲望状況を基本とした上で、相互の社会的関係や過去に聞いた相手の特徴などが意図推定に関係してくる。ここで意外に重要な要素が、相手から受ける印象である。人間である主体同士が出会うとき、その姿形や仕草などから一定の印象を受けることになるが、この印象が相手の意図推定に無視できない影響を与える。その他、それぞれの表情や身振りなども、解釈に当たって大きく影響する。言語記述を処理するに当たっては、言語記述その物に加えて非言語的要素が大きく関わっていると言うことができる。

4.6. 誤った記述・嘘

言語記述の送り手は、事態について常に正しく記述するわけではない。そこにはしばしば本来記述されるべき事態とは一致しない記述が含まれることがある。実際の事態と一致しない記述は、送り手が意図したものかどうかに応じて、誤りないしは嘘と評価されるであろう。記述が実際の事態と整合しないことが判明したとき受け手は、記述された事態をそのまま記述対象となる世界に組み込むのではなく、送り手の欲望傾向や隠された意図について推定し、送り手のモデルを修正することになる。また誤りや嘘の背景を構成する事態にどのようなものがありうるかについて、推定が試みられることになる。

4.7. 受け手の行動選択

言語記述の受け手にとっては、推定された送り手の意図、記述が示す事態が属する世界、記述に関連して補足された情報の全体が新しく与えられた情報となる。結果として受け手の認識する世界は新しい側面を持つこととなるであろう。受け手を含めて個体はすべてその認識する世界の状況の中でその欲望を達成するように行動すると考えるなら、世界の状況に関する認識が変化するということはとりもおさず情報獲得以前の行動戦略が獲得後も依然として有効であることは保証されない。新しい情報が与えられ、世界状況の認識が変化するということは、自身の欲望構造が変化する可能性があるとともに、効率的な欲望達成のために最適と判断される行動も変化する可能性がある。言い換えるなら言語記述の受け手は、記述が与えられることにより、自身の世界状況認識を変化させ、結果として記述を受け取る以前とは異なる行動を取る可能性が生じることになる。この状況の変化は、一般には記述が与えられた時点では可能性に止まるものであり、しかも解釈の多義性から、複数の可能性を包含していると考えられる。

記述の受け手は一般には多くの可能性の中から一つの可能性を取り上げ、実際にその状況が成立していることを前提に行動を起こすことにより、期待した効果が実際に生じるかどうかを検証していくことになるであろう。もし行動の結果が予測とほぼ一致し、取り上げた可能性が実際に成立していると考えられるなら、引き続きその仮定の下に行動を継続することになるし、期待と異なる結果が生じた場合には、想定した可能性が実際には成立していないと判断した上で、実行行動を通して得られた情報も加えた上で総合的に評価を加えて、新しい可能性を取り上げることになる。

記述の受け手のプロセスを考察する場合には、受け手の持つ欲望構造が問題となる。言語記述の受け手が行動を起こすのは、その欲望達成の可能性をより強化するためであると考えられるから、受け手がどのような欲望構造を持っているかが行動を決定する上で重要な要件となる。複雑化した人間社会の中では、欲望達成は自身の社会的関係性に強く関連しているが、このことが人間の欲望構造も、より複雑なものにしている。

送り手と受け手が社会的に良好な協力関係にある時、多くの場合は受け手は送り手の希望する行動を理解し、その行動を実際に行おうとする。これはそのような行動を起こすことが受け手にとっても欲望達成に有利に働くという判断による。つまり、社会的に良好な関係にある時、その関係を毀損するような行動は一般に相互の立場を不安定なものとし、将来的にリスクが大きいと考えられるのに対して、受け手が送り手の希望する行動を取るならば社会的関係性は良好なままに保たれるし、行動の種類によっては受け手である行動主にも利益が生じる場合がある。また、たとえそのような直接的利益が期待できない場合でも、良好な関係が保たれるなら、将来的には自身に役立つ行動を依頼しやすくなるという期待も存在するからである。ただし、送り手が希望する行動の効果を十分に評価できていない場合、また結果として生じる副作用を軽視しすぎている場合、受け手の行動能力を過大／過小評価している場合等では、その理由を指摘した上で行動を起こさず、代替案を提案するなどは考えられるであろう。

友好的な関係の中には、相互の社会的関係性に明確な差がある場合も考えられる。この場合、社会的地位の高位にある側が主として行動を提案し、低位の側がそれに合わせるというのが通常の形になるであろう。あるいは高位にある側が基本的な方針を決定し、低位の側が具体的な行動を立案する場合も考えられる。親子関係や、職務上の上下関係などでは広範な局面で相互の位置が固定されているが、場合によっては位置関係は必ずしも固定されたものではなく、仕事と遊びなど、問題となる局面が変われば位置関係も変化することがある。

これに対して相互の関係が対立的な状況では、対立の対象となっている資源を、相手より先に占有する、あるいは相手より有利な社会的地位を獲得するなどが主要な問題となる。ここで対立する双方の間で妥協が成立するなら大きな問題にはならないが、かならずしもそのような妥協点が見出せるとは限らない。この場合当事者間で紛争が生じることとなるであろう。一般に成熟した安定的な社会では、対立的状況に至った当事者の間で完全に自由な紛争が許されているわけではなく、一定のルールが定められているのが通常である。もし、対立関係が生じた当事者同士に何の制約もない紛争が発生する事を放置するなら、そのような対立関係は最初の当事者間に留まらず、より広範な社会メンバーを巻き込んだ紛争に拡大する恐れが大きいし、制約のない相互攻撃手段の使用を許すなら、周囲の関係のない社会メンバーにも重大な影響が

及ぶ恐れがある。このような事態を避けるためにも、社会は紛争解決の手段を制約するルールを設けることが重要となる。

そこで通常は対立関係が発生したとしても、基本的に社会的ルールの範囲内で決着がつけられることになる。しかし場合によっては一方ないしは双方がルールに違反して、あるいはルールの不備について相手より有利な状況を作り出すことが試みられることもある。

紛争状況における言語使用はいくつかの面で友好的な局面とは違う、複雑な様相を示すことになる。当事者同士の間では、警告や威嚇などにより、相手の行動に対する不安要因を与えることによってその行動を制限する、嘘の情報によって相手の行動を混乱させるなどの他、周囲の第三者に対してメッセージを送ることにより、自身に有利な社会的状況を作り出そうとするなどが行われる。紛争相手からのこれらの言語記述提示に対しては、受け手は送り手の意図推定や記述の属する世界、記述の背後に隠された事態の補足などについて、一層注意深い解釈が必要となるであろう。

人間を含む、社会的集団を形成する動物の場合には、多くの場合、完全な友好関係や完全な対立関係と言うものはむしろまれなものであり、主体の間関係はある局面では友好的であり、別の局面では対立的なものとなる。実際のところ多くの場合には様々な局面ごとに相互の関係は様々なに変化していくのであり、ある局面では対立関係にあったとしても、別の局面では相互に共通利益を見つけることで協力が可能であったり、共通して対立する第三者に対向するために一時的に協力行動をとるなどのいくつかのケースが考えられるのが通常である。

5. まとめ

言語記述は受け手がその行動を変更するという効果が発揮されて初めて実際に機能したということができる。言語記述は、感覚とは独立していること、また、記述の対象となる事態のほんの一部しか記述できないことにより、実際に記述が機能するためには、受け手の側で様々な解釈が行われる必要があるが、ここでは受け手を取りまく、仮想的な世界も含めて様々な世界に関する知識が関与してくる。人間における言語の処理とは、すなわち知識処理であると考えても良いであろう。

言語が感覚から独立した事態の記述を可能にすること、および記述される事態の全体と比較してごくわずかの部分しか記述できない事は、人間にとって世界のあり方に関する可能性を極めて多様なものとする効果を持つ。このことが人間社会を、他の動物の社会と比較して極端に複雑なものとしている。群れを作る動物では、人間に限らず一般に、群れの中の位置関係が欲望達成のために大きく影響することから、位置の獲得自体が欲望の対象となる。人間社会のように複雑な構造を持つ社会では、欲望の構造も複雑なものになる。別の見方をするなら、言語を持つことが複雑な欲望構造の成立を可能にしているとも言える。

複雑な社会とそれに伴う複雑な欲望構造を背景に、人間は相互に言語記述を含む情報交換を行いながら、それぞれの世界認識の構造を変化させていくとともに、各時点における状況に対してそれぞれの欲望構造と欲望達成のために最適な行動をそれぞれに選択していくことになる。

参考文献:

1. 言語と人間、小山照夫、<http://research.nii.ac.jp/~koyama/lang/pdf/lang.pdf>, 2010
2. 人間行動と欲望、小山照夫、<http://research.nii.ac.jp/~koyama/lang/pdf/desire.pdf>, 2011
3. 言語記述の意味と知識、小山照夫、<http://research.nii.ac.jp/~koyama/lang/pdf/meaning.pdf>, 2013